

第5章

地域

—友人・近隣・社会資源—

岩佐 名穂子

はじめに

この章では、友人・知人との関係性、そして社会資源との関係もみていくことにする。ここでいう社会資源とは、病院・商店・老人会などである。

調査結果では、近隣住民とは挨拶を交わす程度であるという人や疎遠になっている人、そして中には友人の話は一切されなかった人もいた。近年では、一人暮らしの高齢者が多いマンションや団地での孤独死が、問題視されている。安否確認のパトロールを行なっているボランティア団体が存在する地域もあるが（NHK福祉ネットワーク『シリーズ 介護保険は“老後”を支えているか（1） 新宿 大都市の団地からの報告』より）、今回の調査地域ではそのような活動をする団体はない。よって、家族や友人・知人、社会資源というものとの関係を持たない高齢者は、社会的に孤立したまま死を迎える可能性があるのだ。

しかし、親族との交流は少なくとも、古くからの友人や近隣住民、馴染みの店など、親族以外の援助者がたくさんいるという人も少なくなかった。安否確認のパトロールがなくても、友人や地域住民、社会資源との関わりが、その役割を果たしていると実感する話がいくつもあった。

いまからそのような具体例を紹介していくことにする。

1 友人・知人との関係

身近に友人・知人がいる人といない人には、何か違いがあるのだろうか。今回の調査では、外出する機会が増えたり、家族以外に体調を心配してくれる人が身近にいる安心感があるという違いがあった。中には友人と旅行に出

かけることもあるという元気な人もいた。

家族にはなかなか言いづらい不満や悩みでも、打ち明けることができるという点でも、友人・知人の存在は一人暮らしの高齢者にとって大きいと言える。ここではそのような、友人・知人、そして近隣住民との事例も示す。

・事例1. 共感できる友人と新しい趣味 69歳・要介護2・Pさんの話

Pさんは6年前に夫が亡くなってから、一人で暮らしているが娘家族が近くにおり、一緒に出かける機会もあるという。そんなPさんには歩いて約15分のところに友人が一人いる。その人とは旧友というわけではなく、Pさんの夫が亡くなってから、知人の紹介で仲良くなった。

「その方もご主人亡くされて、で、一人暮らしじゃないんですけど息子さん夫婦と住んでるんですけどね。まあ色々、いやなこととか悩みとか、お互いにこうね、話し合ったりね、境遇がよく似てるもんやから、話がちょっとやっぱり合うし。で、経験したものでないとわからないことも理解してもらえるのでお互いがこうね、話したり… (省略)。」

前章での兄弟（姉妹）との関係のように、昔の経験や思いを共有できる存在は大切に、支えになっているのだ。Pさんに友人を紹介した人もきっと、二人の境遇が似ていることから、打ち解けやすいと考え、引き合わせたのではないだろうか。

また、Pさんはデイサービスのスタッフとも個人的に交流がある。デイサービスの他の利用者さんとよりも、そのスタッフとの方が気が合うようだ。

「私と話が合ってるね、で個人的に、お休みのときに誘ってくれはるんです。でその方車乗らるから、車で、食事行ったり、でまあちょっと喫茶店でお茶飲んだりとかして。」

そのスタッフと共に新しい趣味、ブリザーブドフラワーを始めたという。

「月に一回ですけども、ちょっと先生のところに行って、でそれも私一人じゃ行けないから友達、車乗られるし、その方に一緒に乗せてもらって、行くんです。」

新しい趣味を見つけて、友人と教室に通っているという人は、今回の調査対象者の中ではPさんだけであった。いくつになっても新しいことを始めようという意欲は大切である。友人と昔話をすることやプリザーブドフラワーの教室へ通うことは、今のPさんにとって生きがいとなっていると感じた。

・事例2. 介護タクシーの“彼氏” 78歳・要介護1・Kさんの話

78歳のKさん（女性）は18年間、脳血栓で半身不随となった夫を介護してきた。夫はもう亡くなられており、一人で暮らすようになって15年程である。2人いる息子のうち、長男はがんを患っており、Kさんの世話は次男の嫁がよくしてくれている。

夫の介護と長男の看病を両立させていたKさん。相当の苦勞をされてきただろう。涙ながらに話す場面もあった。しかし、私たちの前で得意の唄を披露してくれたり、日本舞踊を始めたりと、とても明るい。

「絶対ね苦勞したことは言わない、人には、泣き言を言わない、強く生きる、それが私の勇気ですよ、息子もねお母さんには勝てないって。」

Kさんのこの信条はとても印象的だった。そして何より私たちを驚かせたのは、Kさんに彼氏がいるということだ。相手は通院のために利用している介護タクシーの運転手。

「長男より二つ上ですもん。とってもいいお方なんです。男前なんです。きっちりとしてますもん。…（中略）…『今度、一緒にカラオケいこな』って。『Kさん、二人でいこうな』って。『ふん、二人で』『邪魔もんはよけて』」

友人ではなく彼氏がいる人は調査対象者の中ではKさんだけであった。恋

愛は自由で、年齢も関係ないのだ。Kさんが明るく前向きで、若々しかったのは彼のおかげもあるのかもしれない。とても素敵な話を聞いた。この2名の以外にも近隣住民と交流がある人が多かった。

- ◆ お隣さんいはるし、鍵預かってもらってるからな。2、3日音沙汰なしだったら、不思議に思って開けはるでしょ。そいだら（何か自分の身に起こったとしても）わかってもらえるけどね。（82歳・女性・要介護2）
- ◆ （生協を）今はね、こちら6人ほど組んでやってるから…（中略）…やっぱりそうやって皆でお買い物しとくほうがね。皆さんの顔が見られるから。「元気でいます」みたいな顔見せとかんと、心配してくれはるし。ごみやらでも、ご近所の人がようね、私が持ってぶらぶら行きかけると、「持ってったげるよ」って言うてちゃんともって行ってくれはるから。皆に助けてもらいもって。（81歳・女性・要介護1）
- ◆ なんかいろいろね、近所の世話になってますねん。もうね、嬉しいね。（84歳・女性・要介護2）
- ◆ この人（隣の家に住んでる奥さん）はもう昔から（知り合い）、うちの親の代からです。（82歳・女性・要介護2）
- ◆ 困ったらなあ、近所も助けてくれるし。…（中略）…近所の人、気つけてくれるわけやな色々。（70歳・男性・要介護3）

2 社会資源との関係

次に、社会資源との関係をみていく。社会資源とは初めに述べた通りここでは、病院や近所のお店、また、介護保険の適用ではないサービスのことを示している。長くこの土地に暮らす人は、近隣住民との関係だけではなく、社会資源との結びつきも強い。この結びつきが、一人暮らしの高齢者と社会を繋ぐ大切な役割を果たしていると実感することとなった。その事例を挙げていく。

・事例3. よろず屋さんの晩ごはん 82歳・要介護2・Cさんの話

Cさんは一度離婚経験があり、その後、再婚した夫とその連れ子の三人暮らしで、夫婦の間には子どもはなかった。息子は独立し、現在ではなにか用事がない限り、特に連絡を取ることはない。

「氣使いますわ。向こうは向こうの生活がありますやろ。」

Cさんは息子に少し遠慮をしているようだ。

そんなCさんは配食サービスを受けている。〇〇（名称）というNPO法人で、平日の晩におかずを配達してくれているという。ご飯は自分で炊くそうだ。

しかし、土日と祭日は配達がない。では、それらの日の食事はどうしているのかと聞くと…

「〇〇（店名）さんで、土曜日は晩に持ってきてもらうん。…（中略）…（〇〇さん（店名）は）よろづ屋さんですねん、昔からの。家庭用品やら赤ちゃんのやら（を売っている）。」

近所にある馴染みのお店の人をお願いしているのだ。

「こないだ雪が降ったときも、祭日が続いたときも、あ、お盆やった。『お盆なあ、ここなあ休みやしなあ、スーパーのんやったらいつ焚いたんかわからんけど、あんたとこやったらその日その日に焚くんやさかいに2、3日持つもん持ってきて』言うて。もう好きなことが言えますさかいなあ。…（中略）…たまにお造り持ってきてえなっちゅうて。今まで回る寿司やら行ってましたやんか。それが行かれへんから、お造り持ってきてえなっちゅうて。ほしたらいっぺん焼き魚持って来てくれはって、それが辛いんや。『もうこんないらん、一週間にいっぺんやしかまへん、土曜日ずっとお造り持ってきて』ちゅうて、ハハハ。」

京都市社会福祉協議会のホームページには、配食サービスを実施している施設の連絡先が掲載されていた。しかし、食事はヘルパーに任せているという人が多かったので、Cさんのように配食サービスを利用している人はほとんどいなかった。Cさんの場合は、NPO法人が提供しているサービスであったが、そのようなサービスを行なう企業も存在する。しかし、土日、祝祭日はサービス提供していないとは知らなかった。Cさんに関しては、地元商店との関係があることで、休日の食事に関する心配はないことがわかった。昔から臍貞にしている店があるという高齢者は多いが、Cさんの様に食事の提供までしてもらっている人は少ないのではないだろうか。

「回る寿司も旅行も行かへんのやしなあ、土曜日お造りと焚いたもんと、ちょっと贅沢かなと思ってるんやけど…。」

Cさんにとって、“よろず屋さんの晩ごはん”は配食サービスの食事よりも安心でき、週一回の楽しみになっているようだ。

・事例4. 小さな福祉コミュニティ 91歳・要支援2・Eさんの話

Eさんは91歳で、要支援2の女性である。Eさん自身は大阪の生まれで、結婚後に山科で暮らすようになった。夫はEさんが60代の頃に亡くなられた。子どもは3人おり、長女と次男が週に1回程度Kさんの様子を窺いに来る。週1回デイサービスに通っており、その他週1回はヘルパーを利用している。Eさんは話し始めた時はあまり外出はしていないと言っていたが、話を聞き進めていくうちに、近所の喫茶店に毎朝モーニングセットを食べに行っていて、そこに友人がいるということがわかった。

「私ね、お友達が1人喫茶（店）にいますねん。その人が長いことお付き合いしてくれて、あんばいしてくれはるです。『Eさん、長いこと顔見てないし、いっぺん見てくるわ』ってここへ来たら、『おばちゃん元気？』言うたらもう誰かわかりやしませぬねん。もうその時脳梗塞でしたんやな。声は聞こえてまんね

やで。『Nちゃん（Eさんの友人）違うん？』言ったら『そうやがな』って。ほんでフツと向こうが私の顔見たら目がおかしかったらしいですわ。ほんですぐそこの喫茶へ『Eさんちょっとおかしい』って言って。』

こうして友人Nさんがすぐに喫茶店へ戻り、近所の病院（F先生）にも連絡し、Eさんはすぐに病院に運ばれた。2ヶ月間入院をした。それから約5年。後遺症で左半身がしびれている。

「左やっぱり半分ね。足も半分、軽く。人間座ったらしびれますやろ？ああゆう程度でね。」

しかし、Eさんは今でも毎朝喫茶店に通っている。

「（今日も喫茶店に）行ったよ。行かなんたら腹減るもの。」

Eさんの場合、友人Nさんが心配して訪ねて来てくれなければ、子どもかヘルパーが訪問するまで倒れているのを発見されなかっただろう。そうすると、Eさんはもしかしたら、孤独な死を遂げていたかもしれない。Nさんだけでなく、喫茶店の人、F先生、という3人の素早い対応と連携によってEさんは助かったのだ。

「そこの喫茶（店）とF先生とNちゃん、3人が私の恩人。」

Eさんの回りには、小さな福祉コミュニティが形成されていると言えるのではないだろうか。

その他の意見としては、やはり昔馴染みの商店との付き合いや、地域活動との関わりを持っているという人が多かった。

◆ もう私はずっと（電化製品は）「日立党」でねえ、ほんでねえ、山科に来たときから日立のお店行って、わりあい少ないですねん。で、あそこが一軒あって。

ほんでもう、お父さんがやっていた時代からお世話になってるんですよ。(86歳・女性・要介護1)

- ◇ 一人暮らしのね、お食事会(陵ヶ岡学区)行くのが楽しいね。食事、呼んでくれはんでねえ、ほいであのー、歌うとうたりね、うん。(82歳・女性・要介護1)
- ◇ 婦人会で、もうずっと役員してますしね。(88歳・女性・要介護3)
- ◇ (老人クラブなんかは)もう会費だけ払ってます。(82歳・女性・要介護2)

3 考察

前章で示した家族との関係は、親族であるため、友人・知人、社会資源との関係と比較すると、“強い紐帯”であると考えられる。それに対し、友人たちというのは言ってしまうと他人であり、血縁関係もないので、“弱い紐帯”である。(M.グラノヴェーター)

しかし、決してその“弱い紐帯”を否定的に捉えているのではなく、むしろそれは生活していく上で必要であると考えられる。例えば、家族に対してなにか不満を抱いていたとしても、なかなか面と向かって言にくいということがあろう。不満を言ったことで、関係が上手くいかなくなってしまったとしても、“強い紐帯”であるが故に、そう簡単につながりを絶つことはできない。一方、友人とは“弱い紐帯”であるからこそ、気兼ねなく愚痴を言い合い、共感してもらえることができる。そのような関係も時には必要である。デンマークでは友愛訪問(ボランティア組織が提供するサービスで、主に独り暮らしの高齢者をボランティアが訪問し、話し相手になったりするもの)が孤独感を解消あるいは軽減できるケースが多いことがわかったという調査結果もある。(『高齢者の孤独』より)日本でも傾聴ボランティア(シニア・ピア・カウンセリング)活動をする団体が存在する。実際、今回の調査で、初対面である私たち調査員に対し、息子や嫁の不満を話す人も多く、「また来て」と歓迎されたこともあったほどで、人と話す、思いを伝える、ということの重要性を感じた。

また、社会資源との関係も地域生活には欠かせない、大切な役割を担って

いることがわかった。介護サービスを受けるには必ず経済的な負担が伴う。わずかな年金と家族からの仕送りを頼りに暮らす高齢者にとってそれはとても大きな負担である。しかし地域で生活し続けるためには必要な支援…。その課題を解決しようとする役割が社会資源なのではないだろうか。介護サービスの隙間を埋めるような形で配食サービスを行なっている商店、地域密着型の医院の先生、喫茶店などの“古くからの付き合い”が、単身高齢者を支えているのだと実感させられた。

私が今回見てきた高齢者の実態は、限られた範囲の、ほんの一部にしかすぎない。調査に協力してくれた高齢者は皆、多かれ少なかれ社会とのつながりを持っている。その意味では「孤立」はしていない。同じような単身高齢者であっても実際は、“強い紐帯”も“弱い紐帯”も持たず、調査することができない人たちこそが「孤立」している可能性があるということに気づき、それはこれからの課題であると考える。そして、そのような「孤立」が起らないよう、安心して暮らせる社会・制度を確立する必要があるだろう。

〈参考資料〉

社会福祉法人京都市社会福祉協議会 <http://www.syakyo-kyoto.net/index.php>
特定非営利活動法人市民福祉団体全国協議会
<http://www.seniornet.ne.jp/index.htm>
特定非営利活動法人ホールファミリーケア協会
http://www.5d.biglobe.ne.jp/~AWFC/spc/spc_index.html
NHK福祉ネットワーク『シリーズ 介護保険は“老後”を支えているか(1)
新宿 大都市の団地からの報告』2009年1月19日放送

〈参考文献〉

畠中宗一編著『老人ケアのなかの家族支援 各専門職の役割とコラボレーション』
2006年 ミネルヴァ書房
直井道子著『幸福に老いるために 家族と福祉のサポート』2001年 勁草書房
上野千鶴子著『老いる準備 介護することされること』2005年 学陽書房
香取眞恵子著『「住み慣れた家」で安心して老いる わが子をあてにせず
に老後を生きるヒント』2002年 大和出版
M.グラノヴェーター著 渡辺深沢『転職—ネットワークとキャリア研究—』1998

年 ミネルヴァ書房

ピアギト・マスン&ピーダ・オーレスン編 石黒暢訳 『高齢者の孤独 25人の高齢者が孤独について語る』 2008年 新評論

財団法人 長寿社会開発センター編集 『生きがい研究 (第10号)』 2004年 中央法規出版

財団法人 長寿社会開発センター編集 『生きがい研究 (第11号)』 2005年 中央法規出版